神奈川県立歴史博物館だより

平成30年8月28日発行　通巻209号

AUG. 2018　Vol.24 No. 2

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

古面をたどる
特別展「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」に寄せて …… 2
研究ノート
景観にさぐる東国武士の本拠―武蔵国立川氏と多摩川流域の崖線― … 6
THE けんぱく PUNCH
今月の逸品、はじめました …… 8

御霊神社例大祭の面掛行列（2017年撮影）

古面をたどる
特別展「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」に寄せて

小井川　理

今秋、鎌倉に伝わる祭礼と中世とのつながり、芸能を通して伝えられる中世の宗教儀礼、そして、そうした信仰が伝えられていく中で残されたさまざまな「モノ」資料や文献、伝えていく営みに注目する特別展「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」を開催します。

展覧会では、県内に残されてきた古面を多数紹介します。本稿では、古面を通して、祭礼や芸能、中世の宗教儀礼について何を考えようとしているのか、その一端を紹介します。

展覧会の発端―鎌倉にのこる２つの面掛けの祭儀―

今回の展覧会の発端、着想の源となったのは、鎌倉で行われる、二つの祭礼です。

図１　御霊神社例大祭の面掛行列（2017 年撮影）

一つは、坂ノ下・御霊神社の例大祭です。毎年９月 18 日に行われる例大祭は、神輿渡御に異形の面を掛けた行列（面掛行列）がともなうことで有名です（表紙および図 1）。御霊神社の面掛けは、近世に鶴岡八幡宮の祭礼に坂ノ下の人びとが供奉していた縁から伝えられた祭儀と考えられています。

もう一つの祭礼は、北鎌倉（山ノ内）・八雲神社の例大祭です。毎年７月に行われ、八雲神社の神輿が円覚寺、明月院、建長寺、円応寺、浄智寺、東慶寺の順に北鎌倉の寺院を巡って拝礼し、読経をささげられたのち、山崎・八雲神社の神輿と行き合うという、独特のお祭りです。このお祭りでは、かつて、面を掛けた行列が行われていたと伝えられています。現在は、お祭りの期間中、町内のスペースを借りて、山車装飾の四神や獅子頭とともに７つの面が展示紹介されています（図 2）。

いずれも鶴岡八幡宮との縁をうかがわせる御霊神社と八雲神社の祭儀。鶴岡八幡宮の祭礼を描いたとされる江戸時代の資料「鶴岡八幡宮御祭礼行列図」（東京

図２　八雲神社例大祭での行道面の展示風景（2017 年撮影）

図３　円覚寺弁財天洪鐘祭附祭絵巻（部分）江島神社

国立博物館蔵）には、異形の面を掛けた一群の人びとが描かれています。一方、円覚寺の梵鐘の縁起にちなんで行われる洪鐘祭の様子を描いた「円覚寺弁財天洪鐘祭附祭絵巻」（明治 33 年、江島神社蔵）にも、行列の中に面を掛けた人びとが描かれ（図 3）、祭礼の行列と面掛けの密接な関係がうかがわれます。

面を掛けるという行為は、〈変身〉する行為と言えます。御霊神社や八雲神社に伝わる行道面の、緑や赤といった肌色をしていたり、鼻や頭がとても長かったり、鳥の嘴のような尖った口元であったり、という特徴的な形状こそは、〈変身〉をかなえる形と言えるでしょう。日常とは異なる姿への〈変身〉は、芸能の本質とも言われます。また、八雲神社の祭礼に見られる、神輿が寺院を巡るという祭儀は、近世以前の神仏習合の信仰のありようを色濃く残しています。

古面に注目すること、それが、中世に遡る芸能や儀礼を考える手がかりになるのではないか。その視点から、県内に残された古面をたどることにしました。

古面と舞楽、鎌倉の儀礼空間

県内に伝わる古面というと、鶴岡八幡宮に伝わる鎌倉時代の舞楽面が思い起こされます。

中国や朝鮮半島から伝えられた芸能をもとに形作られた舞楽には、仮面を装着する演目が数多くあります。それぞれの演目と役柄に合わせて面の形が定まり受け継がれてきました。

平安時代以降、舞楽は、奈良や京都など中央の社寺や宮中の儀礼に組み込まれて営まれてきました。舞楽の演奏を担う楽人が組織されて楽所が成立し、演奏のための楽器、面や装束やさまざまな道具が用いられました。

舞楽は、中世の鎌倉にも伝えられました。鎌倉幕府成立以後、幕府や社寺のさまざまな儀礼が整備されていく中で、舞楽ももたらされ定着していきました。神武寺の石造弥勒菩薩の銘文に名を残す中原光氏のように、楽人が鎌倉に下向した例もあります。

鶴岡八幡宮に伝わる舞楽面は、中央で行われた舞楽をそのままに受け継いでいることをうかがわせる正統な作行きのものです。鎌倉の外港であった金沢の瀬戸神社にも、大仏師運慶作の伝承を持つ舞楽面が伝わります。文和二年（1353）に完成した瀬戸橋の供養法会では舞楽が演じられており、美しく華やかな舞楽の場が中世の鎌倉にあったことを伝えています。

御霊神社にほど近い極楽寺には、中世に遡る舞楽面が 2 面伝わっています。還城楽（げんじょうらく）面（図 4）と抜頭（ばとう）面（図 5）、いずれも、量感豊かな正統な作行きです。こうした品格ある古面が伝わることも、儀礼空間としての中世都市鎌倉を物語っているのでしょう。

古面でつなぐ、中世儀礼の痕跡

神奈川の古面というと、彫刻史の上では知られた一面があります。箱根町・阿弥陀寺の菩薩面です（図 6）。頭上に天冠をあらわす優美な作例で、笑みをたたえたようにも見える口元も美しい、品格漂う逸品です。かつて展覧会で紹介されたのちに行われた調査により、平安時代の承安四年（1174）の作であること、もとは大山に伝わっていたことが明らかにされました。

菩薩面が大山に伝来していたことからも気づかされるのは、大山をはじめとする県央山間部の、信仰空間としての歴史の古さです。県央地域に中世の宗教儀礼

図 4　舞楽面 還城楽　極楽寺

図 5　舞楽面 抜頭　極楽寺

図 6　菩薩面　阿弥陀寺

につながるような古面は残されていないのか、鎌倉から県央地域にも視線を向け、先行研究を頼りに古面の作例をたどってみました。

展示では、伊勢原市・大山阿夫利神社の鬼神面、伊勢原市・高部屋神社の三つの古面、伊勢原市・宝城坊と愛川町・清徳寺の獅子頭などを紹介します。

大山阿夫利神社には、大山能に関連した能面や狂言面も数多く伝わっています。鬼神面はそれらの面よりひと時代古く、能面とは異なるものです。牙を覗かせる口元は、何らかの宗教的な儀礼で用いられていたことをうかがわせます（図 7）。

高部屋神社には、制作年代の異なる三面が伝わっています。現在、還城楽の名で伝わる一面（図８）、ウサギの耳のような頭上の突起が特徴的な陵王（りょうおう）面（図９）、そして、癒見（べしみ）面（図 10）です。陵王面と癒見面は、昭和初年まで雨乞い行事に使われていました。舞楽や能楽の場で形が定まり、用いられる面が、本来用いられていた儀礼や芸能の場から離れ、雨乞いという新たな場に再生する様子は、モノを用いる場の変容がモノの意味を変えていく様相を示しているようで興味深いものです。

宝城坊と清徳寺の獅子頭（図 11・12）は、その形姿から行道に用いられたものと推測されるものです。舞楽では、二頭の獅子による行道が行われました。獅子頭にもまた、中世の宗教儀礼の痕跡を認めることができます。

県央山間部は中世以降、修験のネットワークが形成され、愛川町・八菅神社に伝わる資料に見るように、修験の宗教儀礼が盛んに営まれてきました。長い歴史を持つ県央山間部の信仰の全体像を示すことは今回の展示ではかないませんが、芸能と儀礼という視点でこの地域に伝わる資料をどう読み解いていけるのか、古面の存在が視点の一つになればと思います。

展覧会に向けて

展示室には、県内各所からお借りする古面が展示される予定です。古くから存在は知られていたものの展覧会への出品は 20 年ぶりというもの、あるいは長く紹介の機会がなかったものなど、県内にのこる古面を改めてご覧いただくこととなるでしょう。しかし、お面の展覧会なのか、と言えば、違うのです。

この展覧会で考えてみたいことの一つは、古面のようなモノの存在が指し示す「失われた」あるいは「変容した」場の痕跡、現在の祭礼の中に息づく過去の痕跡、そして、ひとつひとつの痕跡はばらばらでも展覧会という同じ場に集うことで見えてくる（かもしれない）中世の信仰空間、そういったものです。

展示する古面の多くは、本来使用されたであろう場から、既に遠ざかってしまっています。しかし、地域の中で大切に残されてきました。今に残されたモノが、かつて生き生きと用いられたであろう場を想像することで、その地域で行われていた芸能や儀礼を考えていくことができるかもしれません。

一方、現在行われている祭礼は、現代という場を前提に成り立っているものです。祭礼を支える人々の努力により、次第や形式が受け継がれていますが、まったく昔のままかと言えば、そうではないでしょう。その変容こそが、祭礼が人々の営みと密接であることの証です。

伝えられた痕跡と、変容の歴史。その両方から、芸能や儀礼という、物質の形では残すことの難しい、その日その時その場に息づく信仰の姿を考えていければ

図７　鬼神面　大山阿夫利神社

図８　舞楽面 還城楽　高部屋神社

と思います。展示する資料は、よく知られた資料もある一方、必ずしも定まった解釈を与えられた資料ばかりでもありません。多様な資料が集う場で、一堂に会したことで紡がれる世界を堪能していただきたい―。担当者としては、展示を見てくださる方々とともに、モノの持つ可能性と出会い、新たな興味や関心が生まれ展開していくような「成長する展示」にしていきたいと思っています。

この展覧会は、「列島の祈り」という大きなテーマのもとに複数の博物館施設で開催される展覧会の一つです。専門領域の異なる各施設が、それぞれに異なる内容で展覧会を準備しています。それぞれの展示をご覧いただき、人びとの祈りが紡いだ豊かな世界を味わっていただきたいと思います。

（こいかわ　あや・当館学芸員）

図９　舞楽面 陵王　高部屋神社

図 10　能面 癒見　高部屋神社

図 11　獅子頭（２頭のうち）　宝城坊

図 12　鎌獅子　清徳寺

人間文化研究機構
「博物館・展示を活用した最先端研究の
可視化・高度化事業『列島の祈り』」

特別展　鎌倉ゆかりの芸能と儀礼

会　期：平成 30 年 10 月 27 日（土）～ 12 月 9 日（日）
休館日：毎週月曜日
※会期中、一部の作品・資料の展示替がございます。

『列島の祈り』　共催展覧会情報

■国文学研究資料館
特別展示「祈りと救いの中世」
10 月 15 日（月）～ 12 月 15 日（土）

■國學院大學博物館
特集展示「舞楽」
9 月 15 日（土）～ 10 月 28 日（日）
企画展「列島の祈り－祈年祭・新嘗祭・大嘗祭－」
特集展示「祈年の法会と神々」
11 月 3 日（土・祝）～ 1 月 14 日（月・祝）

■神奈川県立金沢文庫
特別展「顕われた神々―中世の霊場と唱導―」
11 月 16（金）～ 1 月 14 日（月・祝）

研究ノート　景観にさぐる東国武士の本拠
―武蔵国立川氏と多摩川流域の崖線―

渡邊　浩貴

はじめに

東京・神奈川の境を流れる多摩川には、武蔵国府周辺をはじめ、かつて多くの東国武士が本拠を形成していました。なかでも武蔵国多東郡立川郷（現東京都立川市）を本貫地とした立川氏には、家伝文書「立川文書」が残り、多摩川流域ならではの地域性あふれる武士の姿を垣間みることができます。近年筆者は、立川氏本拠の景観復原を行いました（註１）。小稿ではもう一歩進み、考古学の研究成果を反映させて、立川氏本拠形成の過程をより深く探ってみます。

１．崖線での湧水開発

「立川文書」のなかに、元徳２年（1330）12月21日「周防守貞世相博状写」（以下「相博状」）（図１）という史料があります。これは「周防守貞世」という人物が、立川氏嫡流系の芝崎重清妻藤原氏に対して出した、所領交換の文書です。

「相博状」は、「周防守貞世」が所有していた２町１反300歩の耕作地（弥五郎入道作、二平三入道作、次郎太郎入道・二平三作）を藤原氏が獲得したことを記します。ここで注目したいのは、例えば「限東長町、限南藤源次入道作細田乃**高満々**、限西立河三郎左衛門入道宮田、限北立河六郎次郎田乃**高満々**」(太字は筆者)などと田地の四至表現でみられる「高満々（たかまま）」です。多摩川流域では、長い年月をかけて土地の隆起と川の氾濫などを繰り返して形成された、階段状の河岸段丘がありました。とくに段丘崖を「ハケ」「ママ」と呼び、当該地では国分寺崖線・立川崖線・青柳崖線として有名です（註２）。［史料］の「高満々」とは、当該地の崖線地形を指し示すものと考えられます（図２）。前稿では、この「高満々」を手がかりに立川氏が獲得した各耕作地を現地比定し、それらが立川崖線から青柳崖線に広がる地域に立地すること、青柳段丘面に崖線下の湧水に依存した広い水田耕作地が存在したこと、をあきらかにしました。現況景観では、近世の残堀川開削以降、段丘面に稠密な用水網がめぐり、河川からの取水による灌漑が卓越しています。しかし中世段階では、そのような水利灌漑は一般的ではなく、より湧水への依存度が高い開発であったと考えられます。「相博状」は、立川氏が中世段階に段丘崖上面に広大な安定耕地を獲得した契機となる文書である、と評価できるのです。

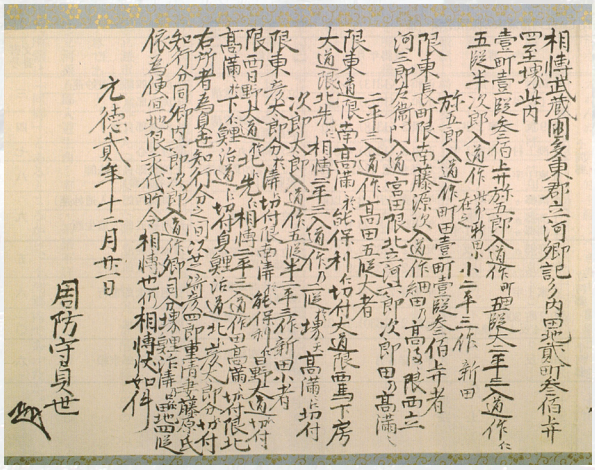

図１　相博状（『立川文書』立川市教育委員会、２０１０年）

しかし、課題も残ります。発掘によって確認された、立川崖線面にある立川氏館跡（現立川市普済寺内）は、15世紀前半から16世紀前半のものとされ、それ以前の鎌倉・南北朝期の同氏本拠は未詳とされました（註３）。また、「相博状」は、写しのみが現存し、発給者の「周防守貞世」も受領官途を持つものの同時代史料から確認できない人物です。ゆえに、偽文書という可能性は払拭できません。室町期以前の立川氏本拠のありかたを探ることは不可能なのでしょうか？

２．立川氏の本拠形成―「相博状」の背後にあるもの―

立川氏館跡の出土遺物を詳細にみてみると、実は手がかりが残されています。深澤靖幸氏の指摘によると、同地では３点の軒平瓦が出土しており、瓦当貼付け技法や瓦当紋が鎌倉市永福寺跡出土瓦と同様の系統に属することが分かっています。この軒平瓦は永福寺のほかに鎌倉市鶴岡八幡宮、横浜市称名寺・金沢文庫遺跡、大磯町国府真勝寺などでも確認され、13世紀末から14世紀前半ごろに収まります。そのため、立川氏館跡出土の軒平瓦も、ほぼ同時期の製品と考えられています。さらに同地の集石遺構から、この軒平瓦とは別の胎土と焼成の特徴をもつ「厚手無文丸瓦・平瓦」が集中的に出土し、14世紀に収まる可能性も示されています（註４）。そのほか、青柳段丘面～立川段丘面周辺では、14世紀前半の板碑が集中的に造立されていたことが分かり、当該地で墓域が形成されていたと考えられます。

現在立川氏館跡にある普済寺は、寺伝によれば文和２年（1353）に立川氏が物外可什（もつがいかじゅう）禅師を招いて開創したといいます。同地には延文６年（1361）の六面石幢の造立、応永３年（1370）の年紀をもつ木造物外可什像があり、貞治２年（1363）から応永７年

(1400)にかけて普済寺版経典の刊行が行われました。これより、普済寺が14世紀後半以降に存在したことは確実でしょう。一方、立川氏館跡出土の中世瓦は、それに先行する宗教施設の存在を示すものです。とくに、13世紀末から14世紀前半の時期に収まる永福寺跡出土瓦と同系統の軒平瓦が出土したことは、当該地に中世都市鎌倉の造瓦所での製品が持ち込まれたことを意味しており、上級権力（例えば北条一門など）と密接に関わる宗教施設の存在を想定できるのではないでしょうか。

かかる理解が正しいとするならば、筆者が検討してきた「相博状」について、その作成背景に以下の出来事があったことを想定できるかと思います。つまり、普済寺創建以前の立川段丘面には、上級権力と関わる宗教施設が鎌倉期に存在し、なんらかの事情により施設が放棄され、土地が手放されていきました。それゆえ、元徳2年の「相博状」では、段丘面上の多くの耕作地が手放され、立川氏が集積することとなったのでしょう。また発給者の「周防守貞世」は、系譜関係など未詳ではありますが、先述した上級権力に連なる人物と解した方が妥当でしょう。仮に、実在しなかったとしても、立川氏にとって、上級権力者から獲得したことを示すことこそ、証拠文書として重要だったと考えられますし、14世紀前半を下限とする宗教施設（あるいは普済寺の前身）が存在し、14世紀後半の普済寺創建前には放棄されていたという出来事が背景にあったことは十分考えられます。そもそも、「相博状」にある、あれほどまでに地形環境に正確な四至を、偽文書として作成することは考えづらく、ベースとなる正文が存在していたことは確実です。現存する「相博状」は、やはり信憑性の高い史料といえましょう。

以上を踏まえ、かつて不明とされた、鎌倉・南北朝期の立川氏本拠を考えてみます。「相博状」によって立川氏は、それまでの沖積低地面を、段丘面上の安定耕地と交換することとなりました。当該地でみられる14世紀前半に集中する板碑造立と墓域形成は、立川氏の動向とリンクするものと推察されます。試みに同じ立川崖線縁辺の他の東国武士の事例をみてみましょう。例えば、武蔵国府近傍に本拠を形成した津戸氏の館跡である本宿遺跡では、13世紀後半から14世紀前半に拠点が置かれたことが分かっています（註5）。また、発掘調査は不十分ですが、谷保天満宮直近の三田氏の城館（谷保城山）も14世紀以降のものと考えられています。こうした近隣での武士本拠形成の動向に鑑みますと、立川氏も同様に14世紀前半頃に、沖積低地から崖線上の段丘面を拠点化し、室町期居館

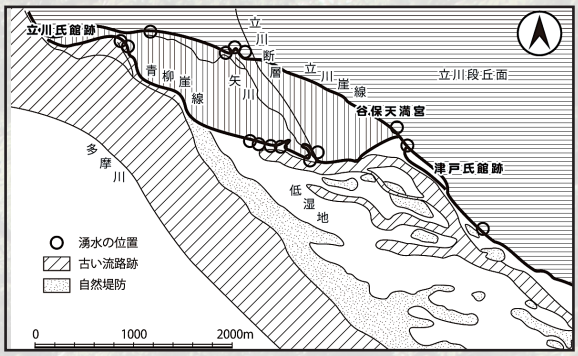

図2　立川郷周辺図
（註2図録地図をもとに筆者が作図）

に先行する本拠を形成していったのではないでしょうか。もちろん、鎌倉・南北朝期の居館遺構が発見されない現状にあって、筆者の指摘はあくまでも状況証拠からみた推測に過ぎません。しかし、考古学の成果とあわせることで、立川氏による段丘面上の本拠形成の契機は、まさに「相博状」が出された14世紀前半にあったことを想定できると思います。

では、なぜ14世紀前半に上述した出来事がおきたのか。これは政治的・環境的要因も含め、今後の検討課題でしょう。

おわりに－景観を「よむ」こと、文書を「よむ」こと－

小稿では、考古学の成果を踏まえて中世景観を復原することで、「相博状」が14世紀前半における立川氏の本拠形成に連動した史料である、と再評価できうることを指摘しました。

東国武士を研究するものにとって、残存する文献史料の僅少さはもはや宿命といえましょう。ゆえに中世文献史学では、史料の欠を補うために、考古学・歴史地理学などの隣接諸学の成果を積極的に吸収して中世景観の復原を行い、あらためて文献史料を読みなおすことが求められます。様々な資料を駆使して、現況景観から中世景観を読み取り、その上で文書の解釈にフィードバックしていく。こうした作業の積み重ねこそが、東国武士研究の前進に結びついていくのです。

註（副題は省略）

（1）渡邊浩貴「崖線の在地領主」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第209集、2018年）
（2）くにたち郷土文化館編『ハケ展』（（公財）くにたち文化・スポーツ振興財団、2011年）
（3）『立川氏館跡』（立川氏館跡遺跡調査会、2000年）
（4）深澤靖幸「国府八幡宮の中世瓦」（『府中市郷土の森博物館紀要』第24号、2011年）
（5）深澤靖幸「府中市本宿の中世遺跡」（『府中市郷土の森博物館紀要』第30号、2017年）

（わたなべ　ひろき・当館学芸員）

WEB 連動企画
「今月の逸品」について語る！

今月の逸品、はじめました

みなさん、こんにちは。学芸員の千葉と申します。なにやらこの春から常設展示に関わる新企画が始まったというので、パンチの守営業部長に様子を聞いてきました！

千葉（以下、千） パンチの守部長、こんにちは。梅雨も明けて毎日暑いですね。部長は見るからに暑そうですけど、毎日どうされていますか。

パンチの守（以下、パ） 最近は暑いので外出はなるべく控えて、涼しい展示室でゆっくり展示を観たりしておる。やはり営業部長として広報のネタ仕入れには展示室を見てお客さんと交流するのがいいんじゃな。それにしても空調工事前に比べて随分快適になったもんじゃ。

千 展示室に涼みに行ってるんですか…。たしかに空調の効きがよくなりましたからね。お客様から「肌寒い」と言われることもあるくらいです。

パ 人間と文化財とでは快適さが一致しないこともあるのでな。ただお客さんが風邪をひいては困るんで、何か工夫をしてもいいかも知れんの。学芸部長にでも相談してみるかの。

千 よろしくお願いします。そういえば、常設展示を紹介する新企画がこの春から始まったとか？

パ そうなのじゃ。常設展示を見ておっても、展示資料が多いもんじゃから、どれをオススメしていいか分からんこともあったんじゃ。それなら学芸員に直接聞いてみようと思ってな。学芸員にオススメ資料を毎月一つ紹介してもらう「今月の逸品」という企画を始めたんじゃ。

千 ほう。

パ ほう、じゃない。学芸員みんな順番でやるんじゃぞ。千葉君は今月（編注・インタビュー時）担当じゃろう。

千 そうでした。原稿もこないだ書いたところでした。

パ うむ。「今月の逸品」は、毎月ホームページで紹介して、展示室でも資料を前に学芸員諸君がお話しするのじゃ。展示室でのお話しは**毎月第３水曜日の午後２時から**じゃぞ。

千 常設展示でも面白い資料はたくさんありますからね。

パ そうなのじゃ。せっかくいい資料を展示しているんじゃからその面白さを伝えたいんじゃ。学芸員諸君も普段からワターシの心意気を見習ってじゃな…（この後、部長の熱いトークが続きましたが、紙面の都合で省略します）

千 さすが部長です。ありがとうございました。

ということで、新企画「今月の逸品」が始まっています！まずはホームページをチェックしてみてください。ぜひ展示室にもいらしてくださいね。

（千葉　毅／ちば　つよし・当館学芸員）

▶千葉学芸員（右）と当館営業部長のパンチの守（かみ）（左）

▶7月の逸品「スタンプ形石器と礫斧（れきふ）」の前で

発行：神奈川県立歴史博物館　http://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter @kanagawa_museum
〒231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：平成 30 年 8 月 28 日　印刷：有限会社イソノ

今月の逸品もこちらから！